

date : 年 月 日

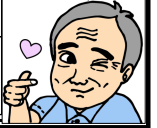
国語学習プリント

学習内容 :

百人一首から

氏名

年 組 番



百人一首をやってきました。

この百人一首とは、鎌倉時代の代表的歌人であり、公家でもある藤原定家が京都の小倉山の山荘で選んだ秀歌撰百首のことで、よく「小倉百人一首」といわれます。のちに「歌がた」として広まっていきました。

古語や歴史的仮名づかいを自然に理解するうえで、和歌はたいへんつつきやすいものであります。

また、我が国の芸術を語る上でも和歌はその中枢にあると言えます。詳しくは第三学年になって学習しますが、われわれが脈々と受け継がれ授かってきた感覚の一端を見てみましょう。

持統天皇

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山

春過ぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり 天の香具山〔万葉集〕

【訳】春が過ぎて夏が来たらしい。真っ白な衣が干してある天の香久山に。

新緑の香具山の裾野に真っ白な衣が干された様子を持統天皇が藤原京から眺め見た様子とされています。

なんともどかな田園風景なのでしょう。神聖な田植えの儀式に早乙女らが着用した白い装束といわれています。

見たまんまを心情に併せて表現している

※持統天皇⇨天智天皇(中大兄皇子)の娘、天武天皇(大海人皇子)の皇后。

後に天武天皇の遺志を継ぎ藤原京を成立させた。

紀貫之は平安期、醍醐天皇の命により編纂された初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の撰者の一人であり、『古今和歌集』の序文である「仮名序」を執筆しているところからも編纂にも携わったとされる、この当時の第一人者です。

紀貫之

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける

〔古今和歌集〕

いさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける

【直訳】人はさあ、その心はわからないが、昔なじみのこの地に咲く花は昔のままの香りで咲いていますよ。

この歌は、大和の長谷寺詣りのたびに宿としていた宿坊の主人に皮肉(嫌味)をいわれたことに端を発しています。その嫌味とは「昔のままに家がありますのに、久しくいらっしやらないのは、もうここはお見限りになったと思いましたよ」という宿屋の主人の恨み言です。その裏には「もつといい場所を見つけてになって、そちらばかり行つてらしたのでしょうか。まあ、人の心なんて変わりやすいっていいですからね。」といった内容が含まれていると思われま

変わりやすいもの⇨人の心

変わらないもの ⇨ 梅の花の香り

宿屋の主人の嫌味攻撃を受け流し、強烈なカウンターをかました歌。

人の心が変わりやすいかどうか、そんなことはわからない。昔なじみのこの土地に咲く梅の花は、昔のままの香りで私を迎えてくれていますよ。宿屋の主人、あなたは嫌味で私を迎え入れるのですね。あれあれ、変わってしまったのはあなたの方では！ 貫之のドヤ顔が浮かぶ

宿屋主人の返歌

花だにも同じ昔に咲くものを植ゑたる人の心知らなむ

花でさえ昔と同じく咲いているのですから、ましてやそれを植ゑた人の心を押し量って欲しいものです。

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容:

百人一首から

氏名

年 組 番

次は鎌倉時代に成立した新古今和歌集から

玉たまの緒をよ絶たえなば絶たえねへながら二句切れば忍しのぶることの弱よわりもぞする係り結び

式子内親王しよくしないうしのう

玉の緒二命

【一般的な訳】

この命よ、絶えるのならば絶えてしまえ。生きながらえると、恋心を秘めておく力が弱まってしまふから

こころえきれなくなつて、他にも漏れ知られてしまふから

【もう一つの考え方】

この命よ、絶えるのならば絶えてしまえ。長い時間がたつうちに、この恋心が弱まってしまふ（薄まってしまふ）のがこわいから

絶頂のままでありたい、終わりたい